

## インカレディベート 参加報告

第20期 二宮 信貴

### ◆インカレディベートとは？

他大学のゼミと、ディベートを繰り広げる場が、インカレディベートです。去年度は、新型コロナウイルスの影響を受け、ZOOMでのオンライン開催となりましたが、本年度は、様々な方の協力により、対面での開催となりました。本年度は、小野ゼミ、関西大学の千葉ゼミ、中央大学の久保ゼミ、東洋大学の竹内ゼミ、立命館大学の菊盛ゼミという、5つのゼミが参加する大会となりました。

### ◆活動後記

20期のディベート練習は混迷を極めました。前年度がオンラインでの開催であったこと、今年は大学が対面に戻ったこともあり、一体どちらで開催するのだろうかという疑問を含んだまま、本ゼミでは対面、オンライン両方の開催を念頭に置きつつ、ディベートの準備が進められました。その後しばらく時が進み、各ゼミから、ぜひ対面で開催したいとお話を受けてきました。関西勢は東京に遊びに来るのか、いいなあ（関西で開催したりしないのかなあ）という心の声を押さえつけ、三田キャンパスでの、数年ぶりの開催となりました。

本年度は、我々20期8人で1チームでした。出番は大トリの第5試合で、対戦相手は千葉ゼミでした。テーマは、「パーソナライズ広告と非パーソナライズ広告、どちらを採用すべきか」というテーマでした。このテーマは一見シンプルで分かりやすいようにみえて、「パーソナライズの定義とは何か？」といったような定義に踏み込む難しいテーマとなっていました。ゆえにディベートはカオスを極めました。

さて、ディベートをするにあたって、小野先生からいくつか大事な教えを賜っておりました。それは、「ディベートとは口喧嘩である」をはじめとする、戦うための心得です。今思えば、20期が攻めっ気に欠けていたからこそのお言葉だったのでしょう。人前でガンガンと発言することを得意としていなかった20期にとって、生真面目に論理を形成していくのではなく、時に勢いと流れで相手を封殺していくことが重要であるという、非常に重要な心得でもありました。

そんなこんなで練習を重ね、いざ本番、となったわけですが、私は、最後のまとめを任されていたこともあり、ものすごく緊張していました。前日のゼミで、「二宮くんはお酒を飲んで参戦しても良いよ」と冗談で小野先生に言われていたのですが、正直、当日はお酒以前におにぎりも食べられない状況で、自分はなんて情けない人間なのだ、自己嫌悪していた記憶があります。そんな状況でグロッキーであったのですが、大して回復しないまま、気づけば大トリ、小野ゼミ vs 千葉ゼミのディベートの時間となっていました。

さて、いざディベートが始まると、僕の頭の中ではギュインと状況にハマり、まるで自分が自分でないような感覚になっていました。感覚で言うと、お酒を飲んでめっちゃめっちゃに酔っ払った時の感覚です（アドレナリンでしょうか）。ある種感動を覚えながら相手の発言に物申し、気づけばディベートは終わってい

たのですが、どうやら相手のチームの女の子を泣かせてしまった（泣いてはいなかったと思うのですが、後からそう言われたので）ようで、僕個人はかなりの響感をくらってしまいました。相手チームの千葉先生がその状況を察知し、インタビュー前に私のところに来てくださり、名誉挽回のための内容を一緒に考えて下さったことでなんとか切り抜けることができました。ちなみに、インタビューの内容は「インタビューを、おにぎりを食べながら、敢えて舐め腐った態度で受けることで、元々不遜な態度の人間であるというキャラを確立する」的な感じでした。はい、名誉は全然回復できませんでした。しかしさすがマーケティングゼミといったところでしょうか、そのインタビューのおかげで、あの場にいた全生徒の中で、知名度はダントツになった気がします。しかし、おそらく世で言う炎上商法というものが、三田の小さな教室で、今、僕に向けて行われているんだという感覚があり、とてもゾクゾクしました。

そんなこんなで、ディベート後のアンケートでは、僕に対する批判が結構あり、やはり炎上商法だったんだなあと思うのと同時に、有象無象が一丁前に他人の批判など書くな、という怒りの気持ちもあったため、元々不遜なのはキャラではなく、素だったのでしょうか。千葉先生はそのことを見抜いていたのかもしれない。

#### ◆得た学び

さて、ディベート大会を経て僕はふたつの大きな学びを得ることができました。まずは、他人からどう思われるかを第一に考えて行動することの無意味さです。確かにディベートのあと、批判はありましたが、一方で、血気盛んな菊盛ゼミの方からは「すごかった！」と握手してもらうなど、嬉しいこともありました。この両極端な評価は、当然狙ったものではありませんでしたが、「他人から嫌われたらどうしよう」とか「いいところを見せない」といった気持ちでやっていたら得られなかったものだったなあと後から感じました。「毒にも薬にもならない」という言葉がありますが、僕は誰かの心の中で、毒か薬として存在していたいです。なので、それ以降、自分の行動の軸に他者からの評価を入れることをやめました。とはいえ、誤解なきように言うと、これは、「自ら行動の軸に他者からの評価というものを入れない方が、他者からインパクトの大きい評価が返ってきやすい」ということなので、決して他者の評価を蔑ろにしているわけではありません。社会人になってからはマネージャーの評価を気にしながら生きていきます…。

ふたつめは、感情のジェットコースターを演出することの破壊力です。今回のディベートでは、うちのチームの國武がベストディベーターとなったわけですが、アンケートを読むと「殺伐としたディベートに差し込む一筋の光！彼が喋るとホッとす！」といったものでした（大意）。つまり、平場で論理的に語るよりも、危機的状況に落とされた後で感情に訴えかけられる方が心に良く響く、ということです。ちなみに、僕はかなりめちゃくちゃ言っていたので、危機的状況に「落とす」役割だったわけですね。これはスゲー使えるぞ！と、アンケートを読んだ時に思ったのですが、よく考えると、ヤ○ザやDVの手法と全く同じだということに気づきました。とはいえ、ディベート会場にいた人は、短い時間で大勢がその手法にどっぷり浸かっていたわけですから、なるほど、こりゃあDV彼氏から抜け出せない当事者の気持ちも分かるや、とひとり納得したのでした。僕は営業職になることがほぼ確定しているのですが、営業手法のひとつとしては昇華できそうだなあとふんわり考えています。

#### ◆まとめ

ここまで、文字だけで長々とよく書けたものだと自分でも驚いているのですが、振り返ってみると、ディベートで得た力を、ディベートだけで終わらせず、普遍的に活用できる力のひとつとして昇華することは大切なことだと感じました。そしてそれはディベートだけでなく、小野ゼミの活動全体でそうすべきだと感じました。一年間の活動を終えたわけですから、ここらで自分の中で棚卸しをして、何が再利用可能な能力か？ といったことを振り返ってみる時間を設けてみるのもいいかもしれません。僕の大好きな名言である、ラリーウォールの「一流のプログラマは『怠惰』で『短気』で『傲慢』であれ」という言葉になぞらえれば、『怠惰』つまり、再利用性を追求し、極力作業を行わない（繰り返しを行わない）ということは非常に大切なのです。まあ、作業を行わなさすぎるのも問題なのですが...（自戒）。



全体写真（今年は服装自由でした）



打ち上げは焼肉でした